

### ①学級づくりは担任カラーで

日常的な学級づくりは、学級担任のカラーによる仲間づくりを基本とする。特別なことを導入することは、学級担任の負担につながる可能性がある。

### ②心通う生活記録・生活ノートの往還を

学級づくりのなかで、学級生徒との心が通い合う取り組みは必須である。その手法は様々であり多岐にわたるが、毎日の制約された時間のなかで学級生徒全員と対話することが難しいことを考えると、生活記録・生活ノートの取り組みは有効であるといえる。生徒によって活字に表すことに得手・不得手はあるが、自分の中にある感情や思い、意見を文字に表すことで客観的に自分を見つめることは、自己の考えを形作っていくうえで欠くことのできないプロセスといえる。日々、生徒から投げかけられた言葉に、教師は様々なイメージを膨らませる。生徒の友人関係、部活動での姿、家庭生活や家族との関わり、これまで育ってきた生い立ちに思いをめぐらし想像する。そして、その時々で最善と思われる言葉を返していく。翌日には、さらに突っ込んだ内面に迫る言葉がつづられていく。このていねいな往還が、生徒との信頼関係を築き、安心して自分が表現できる関係性の土台を築いていくといえる。

### ③授業は生徒がつくる

「集団で語り合う人権学習」に取り組んでいくなかで期待したいこととして、「授業は生徒がつくる」という視点がある。生徒の主体的な語り合いの中から私たちは、それまで見たことのなかった子どもたちの姿を目の当たりにすることがある。それは、表現力であり、人を認めつながる力であり、自分を信じてがんばれる力である。その能力を認知できたとき、教師自身の教科授業が見直されても良い。生徒自身が主体的に授業をつくっていくような授業への改革、つまり、「他律的教育から自律的学習への進展」(『学習原論』木下竹次)となっていくような教師の意識改革につながっていくことを期待したい。

これは、本実践に取り組む教師にとっても同じことである。やらされて取り組むのではなく、自らが主体的に授業づくりに取り組むことである。教師が楽しまないで、生徒が楽しめるわけがない。まず、教師がわくわくするような授業を考えることである。例え課題が出たとしても、その課題を次の授業に向けてのステップにしていけば良い。

### ④道徳と学活の時間確保を

特別な学校行事に消化されない限り、毎週の時間割にある道徳と学活の時間は、確実に保障されなければならない。道徳は、内面を耕す、本学習に直接つながる重要な時間であり、学活は、耕された内面を受けて、主体的に自治力を体現していく重要な時間である。この二つの時間は、主体的な行動を日常的に醸成していくための大切な両輪といえる。

### ⑤様々な視点からの語り

子どもたちに、その時々起こっている社会問題・人権問題などについて朝夕の学活などで語りかけることである。新聞を持ち込み、その時々で話題となっている人権問題を語るのもいい。社会問題に絡めて子どもたちの日ごろの思考や行動を評価してみるのもいい。これらのことから、子どもたちの視野が広がり、新聞や時事問題、知的好奇心としての読書への関心がめばえるとともに、日ごろの生活のあり様や学習への姿勢を見つめ直すことのできる日常づくりにつながっていけると考える。